



311号
2026/3

日中文化交流市民サークル'わんりい'
町田市三輪緑山 2-18-19 寺西方
〒195-0055 ☎ : 044-986-4195
<http://wanli-san.com/>
Eメール:t_taizan@yahoo.co.jp



農業歴正月の初詣：女王谷の村落の外れに在る廟にお参りする人達。年寄りと子供が居て、風俗が伝承される様子に納得します。ただ、観光産業が発展したり新しい農産物栽培が始まって地元の仕事が増えています。成都等の大学で勉強した子供達は田舎へ帰りたがらない傾向があります。

(2014年2月、四川省甘孜藏族自治州丹巴県にて 四姑娘山自然保護区管理局特別顧問 大川健三)

ここでひとつ、知っておいてほしいことがあります。それは、人は必ずしも一つの体質だけを持っているわけではない、ということです。多忙による疲労・ストレス、あるいは季節によっても違ってきます。体質は固定されたものではなく、その時々での体の状態なのです。

だから薬膳では、「自分はこの体質だから、これだけ食べればいい」と決めつけるのではなく、今の自分の体がどんなサインを出しているのかを感じ取ることを大切にします。

これから紹介する8つの体質も、「当てはまるものが一つだけ」ではなく、「今の自分に近いものはどれか」、そんな気持ちで読み進めてみてください。

◎今の自分を知る、やさしい体質セルフチェック

体質はその時々で表に出てくる傾向です。このセルフチェックは、「今の自分の状態は、どんな体質の要素が強いかな」をやさしく見つけるためのものです。深く考えすぎず、「最近よくあるな」と感じるものに○をつけてみてください。

☑ 陽虚（冷えやすい）タイプ

- ・手足が冷えやすい
- ・寒い季節がとて苦手
- ・冷たい飲み物でお腹の調子が悪くなる
- ・朝がつらく、なかなか動けない

→ ○が多い人は、体を温める食事を意識して。

☑ 陰虚（乾燥・ほてり）タイプ

- ・口や喉が渇きやすい
- ・夜、寝汗をかきやすい
- ・手のひらや足の裏がほてる
- ・肌や目の乾燥が気になる

→ ○が多い人は、潤す食材を味方に。

☑ 気虚（疲れやすい）タイプ

- ・少し動いただけで疲れる
- ・声が小さい、話すのが億劫
- ・風邪をひきやすい
- ・食後に強い眠気が出る

→ ○が多い人は、消化のよい、元気を補う食事を。

☑ 血虚（血が足りない）タイプ

- ・顔色が冴えない
- ・立ちくらみを感じることもある
- ・髪や肌のツヤが気になる
- ・爪が割れやすい

→ ○が多い人は、血を養う食材を日常に。

☑ 痰湿（体が重い）タイプ

- ・体が重だるい
- ・むくみやすい
- ・雨の日や湿気の多い日に不調が出やすい
- ・甘いものや脂っこいものが好き

→ ○が多い人は、余分な水分に注意した食事を。

☑ 瘀血（巡りが悪い）タイプ

- ・肩こりや首こりが慢性的
- ・体のどこかに痛みが出やすい
- ・肌のくすみが気になる
- ・同じ場所に不調が出やすい

→ ○が多い人は、巡りを助ける食材を。

☑ 気郁（ストレス影響型）タイプ

- ・ストレスで食欲が変わる
- ・ため息が多い
- ・胸やお腹が張りやすい
- ・気分の波が体調に出やすい

→ ○が多い人は、香りやリラックスを大切に。

☑ 湿熱（こもりやすい）タイプ

- ・体がベタつく感じがある
- ・口の中が苦い、口臭が気になる
- ・肌トラブルが出やすい
- ・暑さが特につらい

→ ○が多い人は、熱と湿をためない食事を。

◎セルフチェックの見方について

- ・○の多いものが、今のあなたの体質傾向
- ・いくつか当てはまっても、それは自然なこと
- ・季節や生活が変われば、チェック結果も変化

薬膳は、今の体を知り、労わるためのヒントです。今日の自分に合う食材を、一品だけでも選べたら、それだけで立派な薬膳です。その日の自分の体に耳を澄ませながら、食事を選ぶ——それが、薬膳のいちばんやさしい始め方なのかもしれません。

1月号に引き続いて、昨年(2025年)11月28日から12月4日まで旅行した西安・陝西省の思い出を綴りたい。11月30日、中国人の友人と参加した「黄河壺口瀑布」への1日バスツアーも終わろうとしていた。帰りのバスが西安市内へ入ったころ、添乗員よりいくつかのお菓子が試食用として配られた。うち「梁家河」という^{おこし}粗粒風のお菓子を買うことにして代金を払ったものの商品を渡してくれず、^{いぶか}訝るうちにバスを降りそのままホテルに入ると、フロントに当該商品がすでに届いていたのには、ちょっと驚いた。

次の日(12月1日)、今度は「兵馬俑」見学を主としたバスツアーに参加した。前日は大型バスだったが、この日はマイクロバスで、参加者は私たち2名のほか、5人連れのみだった。8時半すぎ、ホテル近くを出発。10時前に市内臨潼区に広がる「秦始皇帝陵博物院」に到着した。この博物院は「秦始皇兵馬俑博物館」(1979年公開)区と「秦始皇帝陵国家考古遺跡公園」(2010年公開)区、2つの地区から成る。後者は別名「麗山園」と呼ばれる。なお、今回行くことはできなかったが、この周辺を一望できる海拔1301.9メートルの「驪山」という景勝地もある(こちらの漢字は馬偏)。秦始皇帝陵が位置するのはこの驪山の北の麓に当たる。

麗山園の入り口でバスを降り、園内専用の乗り物で展示施設に向かった。その1つ「銅車馬展厅」では始皇帝陵から発見された1対の4頭立て銅車馬(銅製馬車)を見ることができた。実際の馬車の2分の1の大きさに作られた模型の実物である。一号馬車は長さ2.25メートル、高さ1.52メートル、二号馬車は3.17メートルと1.06メートルである。この銅車馬坑は1978年6月に発見され、2台の馬車の副葬品が出土したのは1980年の11月から12月にかけてである。当時の写真を見ると、大きく壊れているが、全体としての位置関係あるいは個々の部品は確認可能であったことがわかる。修復作業を経て、現在の展示が実現した。写真は「安車」(座って乗れる車)と呼ばれる2号馬車のほうである。



2号馬車(2025年12月撮影)

昼食後は「秦始皇兵馬俑博物館」地区へ移動する。まず、「大秦劇場」で『復活的軍団』と題する劇を鑑賞した。劇場内は多くの観光客でごった返していた。劇が始まると、幕ごとに舞台が変わるのではなく、我々観客のほう移動する。暗がりの中を大勢の観客が、いい場所を確保しようと一斉に移動するため、うっかりすると跳ね飛ばされそうになった。

「实景沉浸式多媒体」(リアルシーン没入マルチメディア)による演出で、たとえばある場面では、背景のスクリーンにはCGによる壮大な戦いの様子が映し出されている一方、その前では実際の役者が演じる兵士が戦っている。また、(観劇後に見学する)兵馬俑の隊列の映像の中に生身の兵士が混ざっているという場面もあった。

以下、『百度百科』の記事等も参考に補うと、この劇の題材は1975年に湖北省雲夢県睡虎地で発見された木牘(木簡)(文章を書いた細い木の札)に書かれていた家族宛ての手紙(今で言う中国語の「家書」)からとられている。楚と戦っている秦の兵士「黒夫」と「^{りょう}驚」の兄弟が長兄の「衷」に宛てて出した手紙で、527文字が墨で書かれており、衷の墓から出土した。手紙の内容は、軍隊での生活の様子その他、母親の安否を気遣うなど、家族への思いやりが綴られている。中国史上最古の家書であり、秦代の家族関係などを知るうえでの貴重な資料である。ここで中国の「家書」とは、単なる家族への手紙を超えて、歴史的記憶、そ



劇「復活的軍団」より(2025年12月撮影)



兵馬俑1号坑(2025年12月撮影)

の時々、個人的な感情、祖国の平和を願う気持ち等を後世に伝える、文章作品の一ジャンルを成している。たとえば、昨年2025年には「全民族抗戦勃発88周年および中国人民抗日戦争・世界反ファシズム戦争勝利80周年」を記念して『人民日報(海外版)』紙上で「人民家書」という連載が始まり、著名人のものを含むさまざまな内容の家書が紹介されている。

写真はカーテンコールの様子である。前列が母親ほかの家族、その後ろに立つ2人が戦乱の犠牲となった黒夫と娘であると思われる。さらにその他の兵士を演じた人間が並んでいる。もしかすると人気の役者が含まれていたかもしれない。ところで、現在中国ではヒト型ロボットが急速に進歩していると聞くから、いずれ、実際の役者の出番は無くなってしまいかもしれない、などと不穏な(?)ことを考えてしまった。

観劇料金はツアー代金とは別に、約220元(≒4,400円)ほどかかる。ツアー代金は280元だから、かなり高額ではある。見ないという選択もできるが、兵馬俑の見学時間まで、劇の上演時間70分ほどは外で待つことになるため、バスツアーではほとんどの人が観劇を選択するようだ。なお、この劇については西安駅の地下通路にも大きな広告看板が掲げられていた。

ツアーの最後は「秦始皇兵馬俑博物館」の見学である。始皇帝陵の従葬坑である兵馬俑坑は1号、2号、3号の3つがあり、発掘後はそれぞれ全体が展示館の建物で覆われている。このうち、1号坑が最も規模が大きく、見応えがある。1974年3月、井戸を掘っていた農民により発見され、その後発掘調査が進められて、1979年10月1日に現在のような展示館が

完成して一般公開されるようになった。東西230メートル、南北62メートルの広さがあり、約6,000体の陶製の人形(俑)と馬が副葬されている。「世界第八大奇跡」(世界の第八番目の奇跡)として知られ(世界の第八番目の奇跡 [=不思議。英語では Eighth Wonder of the World] とはいわゆる「世界の七不思議」に次ぐ注目すべき構造物を意味する言葉である)、1987年には秦始皇帝陵とともに世界遺産に登録されている。映像や写真では見る機会も多い兵馬俑であるが、やはり、実物に接するとあらためて、その壮観さに圧倒される(写真)。言われるようにずらっと並ぶ兵士の表情は実に生き生きとして個性的である。秦の始皇帝は、度量衡、車軌(馬車の轍の幅)、文字のほか、「焚書坑儒」により思想の統一までも図ったが、一方で人間の多様な個性を尊重していたとするなら、大変興味深いことだと思う。

2号坑、3号坑と見学も終わり、帰りのバスに急ぐ路上では、農家の人がさまざまな果物を売っていた。直径3、4センチほどの小さな柿を十数個、4元(80円)で買った。柔らかく甘くて美味しかった。こうして、2日目のバスツアーも無事終わった。私にとっては、中国の国内観光客向けツアーに潜り込んだ(?)という意味でも貴重な体験であったが、やはり時間に追われた感は否めない。また、ガイドによる展示の解説も早口で(もちろん、中国人にとっては普通の速さ)聞き取れなかったのは残念だった。もっとも、同行の中国人の友人にも説明が微細に亘っていて、分かりづらかったようだ。(つづく)

■参考資料:『百度百科』、『地球の歩き方:西安他』(2019年11月版)他

晩秋のカラコルムにて (12)

ウランバートルへの帰路よもやま(2)

吉光 清

日曜日の夕食後には、NHKの「ダーウィンが来た！」を家族と一緒に観るのが我が家の日常になっている。われわれが到底赴く事が出来ない場所でのいろいろな動物たちの行動や珍しい場面に興奮し、時には笑ったり感動したり、興味が尽きない。

この番組の最後で次回予告を兼ねるアニメ「マヌールのゆうべ」がまた面白い。ここに登場するのがマルマルとした体型の「キッチンマヌール」の「マヌ子ママ」(「マヌル猫」)で声の出演はてっきり「マツコ」と思っていたら、実は俳優の「山田孝之」であった。「ツノミン」など、他のユニークな動物キャラクターとの掛け合いやオチの川柳につい笑ってしまう。

ウイキペディアによれば、名前のマヌル(manul)はモンゴル語の「小さい野生ネコ」に由来し、中央アジアを中心にインド、中華人民共和国、ロシア南部などの岩場の多い草原、ステップや半砂漠などの過酷な環境下でも生息する。「ベンガルヤマネコ属」との共通祖先と590万年前に分岐したと推定される古代ネコで、本種のみで「マヌルネコ属」を構成する。日本での別名は「モウコヤマネコ」である。

体長は50~65センチ、尾長21~31センチメートル、体重はオス3.3~5.3キロ、メス2.5~5キロ。他のネコ科の動物と比べると足や爪が短く、臀部がやや大きい。特徴的な顔つきで、目の位置が高いところにあるので(平坦な砂漠やステップで、岩陰に臥せて岩の上から目だけを出して獲物を狙うのに適している)、額は高く、丸い耳が低く離れた位置に付き、頬、顎から喉にかけて長い白色の体毛が密集し、目の端から頬に黒色の縞が走っている。胴体は橙色を帯びた灰色、腹面は白っぽい灰色の長い体毛で覆わ



「マヌル猫」(ウイキペディアより)

るので、丸々と太った体型に見えてしまう。腰に茶色の横縞が走り、尾には5、6本の黒い縞模様が入り、先端は黒くなっている。主にハタネズミなどの齧歯類、イワシャコ類な

どの鳥類などを捕食するが、音を立てずゆっくり忍び寄り、逃げ出した獲物を捕食したり、巣穴の入り口で待ち伏せを行うなどの方法で狩りを行う。逆に、危険を感じると地面に腹這いになりジッと動かなくなる。長い毛のお陰で、雪の上や凍った地面の上でも体を冷やさずにすむ。

毛皮の利用や、モンゴルやロシアでは脂肪や内臓が薬用になると言われて捕獲され、生息地での狩猟の禁止や毛皮の商取引が規制されても密猟が続き、マーモット類と誤っての狩猟、罠による混獲、牧羊犬や野犬による捕食などにより、農地開発などの生息地破壊と相俟って生息数は減少している。

先日の番組の中では、当の「マヌル猫」が取り上げられていた。傑作だったのは、「マヌル猫」がネズミを捕獲する場面で、尻尾を高く直立させて、黒く丸くなった尾の先を震わせると、アラ不思議、ネズミは魔法にかかったように全く動かなくなってしまい、易々と捕食されてしまうのだった。

「上野動物園」を始め、国内の動物園でも「マヌル猫」が飼育されているが、こんなシーンは大自然の中でなければ見ることは叶わないであろう。

■辿り着いたドライブインにて

車で3時間ほど走り続けて辿り着いたドライブインが果たすべき、第一の使命は『トイレ』の提供である。それを示すかのように、建物正面の入り口の頭上には大きな「TOILET」の文字が存在感を示して



(上) 彩り豊かな13本の旗 (下) 干し草を高く積んだトラック



ハラホリンへの往路で見学した「羊の解体」

いる(わりい 310 号掲載の写真参照)。

日本の高速道路上に設置されているパーキングエリアよりはレストランや売店などの売場が広く、建物全体の規模は大きいですが、給油施設は併設されていない。道路との境界に沿って、ポールが建てられ、色とりどりの旗が掲揚されていて、数を数えてみると13本だった。ここに友好国の国旗を掲揚することは無いだろうし、モンゴル国内の各州の旗かと思ったが、それだとちょっと数が合わない。

夕暮れが迫ってきた時刻のせいか、天候が崩れたら雪になる季節のせいか、駐車中の車は数えるほどで、駐車場は閑散として静かであったが、時折、轟音を響かせて、大型トラックが通り過ぎてゆく。西に向かって、荷台に高く、干し草を積み上げ、シートを掛けたトラックが2台通っていった。東へ向かっては、日本では見かけない形の台車を連結したトラックが走っていった。

差し迫った用事を済ませて、店内に入ってみたが、市街地のスーパー並みに、たくさんの種類の食品、スナック類や飲料が揃えられていた。見覚えのある韓国製のカップ麺は韓国からの出稼ぎ者が多い現状を表しているようだった。

■ここで羊の解体を見たのだった(回想)

ハラホリンへの往路の途中で、羊の解体を見学出来た場所を探したが、見つけれないまま通り過ぎてしまったようだ。

羊の解体を見学出来たのは全くの偶然で、道路近くに建っていたゲルの傍らで、日常的な家事としての作業が行われていた。勿論、他の見学者は誰も居なかった。

地面に敷いたシートの上で、男性が羊の腹部を縦



ハラホリンへの往路で、6年ぶりの「ラクダ乗り」

に切開して内臓を取り出した。それを奥さんらしい女性が受け取り、樹脂製の大きな皿の上で、もう一人の女性が手桶から流す水で揉み洗いしていた。洗浄された内臓は傍らの金属製のバットの上に並べられている。男性は次いで毛皮を剥ぎ取ろうとしている。話に聞く通り、シートや地面の上には一滴の血もこぼれていなかった。そうした作業を、少し離れた陽向で、老齢の婦人が孫と思われる赤子を抱きながら見守っていた。穏やかな日常の姿だった。

■6年振りだった「ラクダ乗り」(回想)

もう少しウランバートル寄りの場所が「ラクダ乗り」をした場所だった。2度目の経験だったので、ハテ最初は何処に旅行した時の事だったかと考えたら、敦煌の「鳴沙山」での事だったと思い出した。数えたら6年前の事であった。今回と同様に個人プランのガイド付き旅行だったが、「ラクダ乗り」はその場でのオプションであった。参加者の数が十数名になるまでは出発せず、ラクダ同士は連結されていて、一人の従業員が先頭のラクダ一頭を曳いて歩くのだった。歩き出すと隊商のような趣になったので、成程と思った記憶がある。

今回の旅行プランに「ラクダ乗り」を予め組み込んだら、旅行社に「ラクダ乗り体験同意書」を提出させられた。本人の行動や不測の事態で事故が起きても旅行社は責めを負わないというものだった。

ここら一帯は草地が後退してしまい、すっかり砂漠化しているが、遠景には緑の小山が見え「月の砂漠」のような風情は無い。砂漠化を逆手にとった観光事業であろうが、あまり喜べない。(つづく)

●資料:「地球の歩き方 モンゴル」,(2024年~2025年版),株式会社地球の歩き方

太陽がゆっくりと昇り、遠くの山々に立ち込めていた靄が次第に薄れていった。私たち三人のぼんやりとした思考も、冷たい風に吹き飛ばされたかのように、忘れかけていた高山病が急に襲ってきた。頭が割れるように痛み、吐き気がして立ち上がることもさえできない。よろよろと山頂から車へ逃げ込み、私たちは順番に酸素を吸入し、激しい頭痛が和らぐことを願った。

王運転手がエンジンをかけ、「天葬を見に行きましようか」と提案した。私たち三人は揃って、「もういいです。死にそんなほど具合が悪いから、早く低い所へ行きましょう」と答えた。「どこへ行きますか？」と王運転手が尋ねた。「どこでもいいです」と私は答えた。昨夜はほとんど眠れず、三人とも揺れる車中ですぐに眠りに落ちた。どこへ？ — わからない。

どれくらい経っただろうか、私は昏睡のような眠りから覚めた。夫と息子はまだ眠っていた。窓の外は、黄土色の高原ではなくなっていた。点々と緑の植物が見え、突然飛び出してきた猿の姿もあった。「ここはどこですか？」と王運転手に訊いた。「観音橋に近づいています。今日は甲居チベット族村寨という所に泊まりましょう、標高が低いからです」。親切に先の旅程を既に考えてくれてい

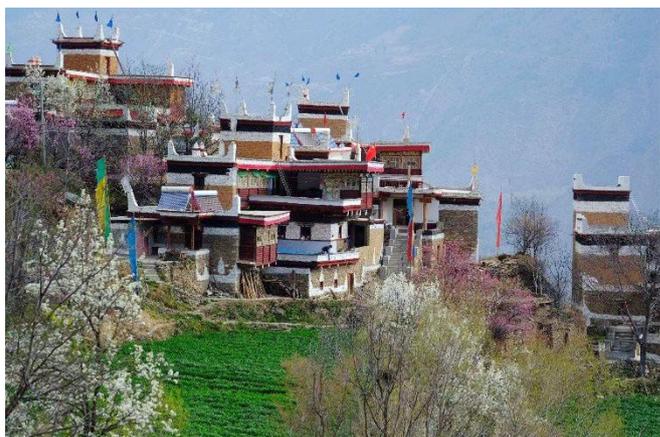
た。私は「はい」と答えながら、「どんな所だろう？」と内心想った。

うねうねと山道を下り続けると、窓の外はますます緑が濃くなり、遠くの川辺には白い梨の花やピンクの桃の花が一面に咲いていた。田んぼで働くチベット族の人々、そして断続的に聞こえてくる歌声。春の訪れを感じた。夫と息子も目を覚ました。ぐっすり眠れたからか、4000メートル以上の高地から下りて酸欠状態が解消されたからか、みんな元気を取り戻したようだ。昨日一日の経験はまるで夢のようで、今はその夢から覚めた感覚だった。ぼろぼろの道路は相変わらずで、土ぼこりと、どうしても避けられない大きな穴だらけ。ガタガタ揺れる車の中、今日一日は、骨がバラバラになりそうな気がした。

ようやく丘を一つ回り込むと、群青色の山々にたなびく夕もやの中から、一筋の金色の陽光が差し込んできた。その光はちょうど中腹にあるチベット族の集落を照らしていた。集落の家々はすべて石を積み上げた四角い造りで、塀は白く塗られ、その周囲に黒と深紅の帯が巡らされ、四隅には旗を立てられ、風にひるがえってパタパタと音を立てていた。ここは全く別の、神秘的で桃源郷のような世界で、現代生活の騒がしさや欲望は微塵も



遠くに望む梨花に囲まれた里



甲居チベット族寨子(頂上にある)



山深き地にあるチベットの岩集落



康祝おじさんの家



私たちの部屋

感じられなかった。

車は中腹までしか行けず、集落の中に車が通れる道はなかったので、歩いて入るしかなかった。道中、二人の少女に出会った。彼女たちは乾燥したトウモロコシの入った重い籠を背負い、警戒した様子で私たちを見つめ、ぎこちない中国語で「どこから来たの？ 誰を探しているの？」と訊いてきた。私は「上海から来た旅行者です」と答えた。彼女たちは驚いた顔で私たちを見て、「ここはただの山の中ですよ。何が面白いのですか？ 上海はいい所ですね、テレビで見たことがあります」と言った。私は答えに詰まってしまった。私たちは一体何を見に来たのだろうか？

集落に入ると、王運転手が親切に、彼のチベット族の友人、康祝おじさんを紹介してくれた。おじさんは、以前成都で出稼ぎをしたことがあり、その時に王運転手と知り合い、中国語も話せる方で、自宅でチベット族の民宿を営んでいた。私たちは興味津々だった。ゲームの世界のようなこの家の中は、いったいどんな風になっているのだろうか？

康祝おじさんの家は広く、この集落で最も美しい家だった。とても清潔で整った庭があり、色とりどりのチベット様式の二階建て家屋は、すべて

石積みで、外壁は白、赤、黒の塗料で彩られ、窓や扉はとても鮮やかな青、赤、黄、黒で、実に美しかった。部屋の中に入ると、「わあ、本当にきれい！」。唯一の問題は、部屋の中に水がなく、洗面も庭の井戸端でしなければならないことだった。康祝おじさんは熱心に自分の家を紹介してくれた。ここは都会のホテルのような豪華さや快適さはなく、シャワーも使えないが、まさに本物の^{ジヤロン}チベット族の生活なのだという。食堂はなく、宿泊者には食事が提供され、6人集まると食事開始、8品のおかずとスープが付く。私たちと王運転手を合わせても4人、あと2人足りない。康祝おじさんは「他のお客さんと一緒にすればいい」と言った。私は民宿のあちこちを見て回る気にもなれず、何とかあと2人の客を連れてきて早く食事ができないかとばかり考えていた。ああ、お腹がすいた。

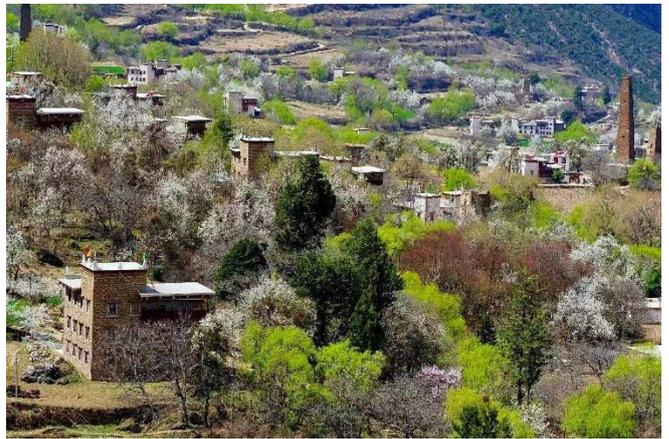
ようやく日が暮れかけた頃、何人かの客が到着した。川西で道路工事をしている人たちだという。私は急いで近づき、「一緒に食事しませんか」と自ら声をかけた。彼らはきょとんとした顔で私たちを見て、互いに顔を見合わせた後、笑いながら「ええ、いいですよ」と答えてくれた。色鮮やかなチベット式の木製テーブルを囲み、康祝おじさんが料理を運び始めた。私たちは自己紹介をした。四川、

湖南、河北から来た、全く知らない者同士が、この食事制度によって一緒になったのだから、全く不思議な縁だ。みんなはすぐに打ち解け、笑い声と共にそれぞれの旅の話をし、周囲の風景は本当に美しいが、この道はひどすぎる、あまりに不便だ、と意見が一致した。ここに立派な道路ができさえすれば、こんなに不便なことはなくなる。不思議な縁が私たちをここに集め、一緒に食事をさせてくれた——さあ、乾杯!

この夜、やっとお腹いっぱい食べて、ぐっすり眠ることができた。朝起きると、他の客はすでに出発しており、周囲は静かだった。宿泊した二階から下を見下ろすと、愛らしい男の子がきちんと座り、庭で中国語の勉強をしていた。階段を下りて子供に話しかけた。

「中国語の勉強をしているの?」「うん」、「難しい?」「難しくない」、「学校は遠い?」「遠くない。山を下りて2.5キロくらい歩けば着くよ」。それでも遠くないのか、と私は内心思った。「どこか行ったことある?」「近くの金川県城に行ったことある」、「将来何になりたい?」「この山々を離れて、外の世界を見てみたい」。子供は答え終わると、またうつむいて勉強を続けた。

康祝おじさんがチベット式の朝食を運んできた。食べながら、私たちは彼と話し始めた。康祝おじさんは集落では珍しく中学校を卒業した教養のある人で、何百年も前、漢族との戦いに敗れたた

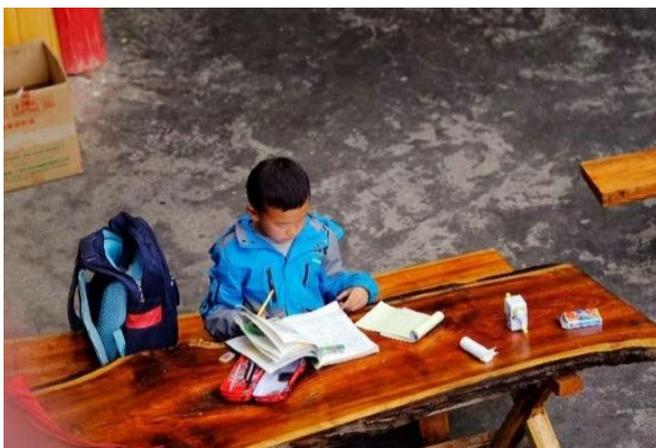


チベット族の村寨と石造りの望楼

め、彼ら嘉絨チベット族の人々は山に逃れてこの集落を築き、防衛のために多くの石の塔(望楼)を建てたのだと教えてくれた。ここに住む多くの人々は一生山を出たことがない。彼自身は貧しさのため、若い頃に山奥を離れ成都に出稼ぎに行き、多くのつらい仕事を経験した。彼は近代的な生活がどんなものかを見て、集落の貧しさは外の世界を知らないことにあると考えた。自分の子供には勉強させ、山を出て外の世界を見てほしいと願っている。チベット族は一生この山々に閉じこもり、貧しいままではいられない。それでは未来はない、と。

私は振り返って夫と息子を見た。複雑な気持ちだった。私たちは大変な苦勞をして、こんなに遠くまでやってきて、チベット族がどう暮らしているか、彼らの家はどんな風か、彼らの生活はどんなものか、彼らが信じる神々を見たいと思った。しかし、ここに住む人々は、ここを離れて私たちの生活を見てみたい、現代的な生活を送りたいと夢見ている。これはなぜだろう? 彼らにとっては生存のためだろうが、私たちにとっては? 好奇心か? 現代社会の影響を受けていない純粋な異文化への憧れか? 私たちは一体何を見たかったのだろう? 旅の中で最も心を動かされるのは、目に映る美しい景色ではなく、一期一会の人々と、彼らの物語なのかもしれない。

■嘉絨チベット族は、四川の山間部に住み、独特の言語と、石の硤楼・蔵寨で知られるチベット族の一支族。



中国語を勉強中の男の子

台北で雨のハイキング (1) 銀河洞・猫空

文と写真=佐々木健之^{たけし}

私ら夫婦は 2025 年暮れから 2026 年正月にかけて、台北起点の日帰りハイキングで3日間、3コースを歩いた。参考資料は雑誌「山と溪谷」2024年4月号付録「台湾山岳案内」から、台北近郊の低山をあさった。

12月30日から1月1日まで連泊した宿は「福容大飯店」というチェーン店のひとつで新北市深坑区の「福容大飯店台北二館」だった。大晦日に台北市内では空いている宿が無く、不本意ながら郊外の宿になってしまった。朝食は6:30開始とのことで、開始と同時にレストランに行くと、早すぎたのか汁ものがぬるかったりの不具合もあったが、概ね満足な品ぞろえであった。

最初の山行は、12月31日で銀河洞越嶺歩道「銀河洞・猫空」コース。銀河洞とは道教の寺院である。その建物は滝の懸崖に嵌めこんであって、良く作ったものだとびっくりしてしまった。

銀河洞へはバスも有るのだが、1時間に1本と少なく、泊まっているホテルからは乗り換えや行程が煩雑なので、タクシーで行った。ホテル前で



登山アプリ、ヤママップで記録した歩行跡。地図は Mapbox を土台としている。

客待ちのタクシーが止まっていたので乗り込み、「銀河洞バス站」と書いた紙を見せると、ナビ用のスマホで何やらいじったのち OK とのこと。銀河洞は観光地なのですぐ分かるかと思ったが、そうでもないらしい。20分ほどで銀河バス停に到着、料金は465元。以前は1台湾元3円と覚えていたが、今では1台湾元は5円となってしまう、損をした気分だ。台北での買い物には反射的に×5と計算するので、いささかわびしい。それでも台湾のタクシー、バスや台北 MRT (地下鉄) は日本に比べれば格段に安く、465元は×5で2325円だから、走行距離からすると割安感がある。しかし、円高の頃の×3だと1395円なので年金暮らしとしては気持ちがへこむ。

タクシーの運転手は、乗り込んだ我々が日本人だと分かると、八代亜紀の歌をまねて「~雨~アメ」と口ずさんだ。その通りで雨が降ったり止んだりの、ハイキングには適さない天気だった。

8:40に銀河洞バス停に到着。ベンチと屋根のあるバス停だった。ここで雨具を付けたり傘を出したりの身支度をして出発。歩き初めは谷沿いの舗装道路を傘を差して歩く。20分も歩くと、ぼーとかすんだ山腹に滝のかかっているのが見えた。銀河洞瀑布らしい。台湾では(中国もか?)滝のことは大小にかかわらず瀑布になるようだ。

8:40に銀河洞バス停に到着。ベンチと屋根のあるバス停だった。ここで雨具を付けたり傘を出したりの身支度をして出発。歩き初めは谷沿いの舗装道路を傘を差して歩く。20分も歩くと、ぼーとかすんだ山腹に滝のかかっているのが見えた。銀河洞瀑布らしい。台湾では(中国もか?)滝のことは大小にかかわらず瀑布になるようだ。

銀河洞入り口に東屋があり、ここに来るまで誰にも会わなかったが、観光客らしい白人の若い女性が一人休んでいた。聞くとアメリカ人だという。

ここから階段を交えた小道になり、再び傘を差



銀河洞バス停で身支度。最初から雨は気が重かった。



銀河洞と銀河洞瀑布。滝の先に「呂仙祖」像の部屋がある

して登る。持参の温度計は17℃で、雨降りでも寒さは感じない。南国台湾なので大晦日でも周りは青々と植物が茂っている。連れ合いが「ミズ」と指さした。確かに日本の北国で山菜として食べるミズが生えていた。

階段を上り詰めたところに「銀河洞」はあった。懸崖のくぼみに巧みに入れ込んだ廟である。周りのシダ植物や灌木類に飲み込まれそうに見える。すぐ左手に「瀑布」が落ちている。雨が続けているせいか結構な流量と水しぶきだ。傘をつぼめて中に入ると祭壇が有り、さらに左手の崖に沿って廊下が飛沫を飛ばす滝裏に続いている。

私は尾根に続く遊歩道は滝裏をくぐって、続いていると思ったのだが、飛沫を避けながら滝の裏側の通路を行くと、行き止まりになってしまった。そこはちょっとした広場で「呂仙祖」と書かれた大きな立像があった。像は道教の神様らしい。台座に「民国四十七年」建造との表記があったので、帰国してから調べると西暦1958年とのこと。ウイ



「呂仙祖」像

キペディアによると以前からあったらしい古い建物がこの年に今ある銀河洞に修復されたようだ。

「銀河洞越嶺歩道」の続きを探して廟の外へ出ると、連れ合いが、ここが登山道らしいと見当をつけて、上に行く道が見つかった。この頃になると、路線バスが着いたのか、数人の観光客風の男女が声高にしゃべりながら登ってきた。

見逃した階段の登山道に入って、滝上近くを通ると小川となった谷に沿って道が続く。10時ごろ尾根上の峠に着いた。分岐路と案内図があった。ここから「猫空」地区に下る緩やかな巻道の「樟湖歩道」となり、これを進む。やがて林が開けて明るくなると人家が現われた。泥道が舗装道路になると「猫空」の道路標識が立っている辻に出た。

「猫空」とは地名なのだがウイキペディアによるとその由来は、

【川によって削られた岩肌が「壺穴」(ニャオカン)のようになっており、ゴツゴツした岩肌のことを台湾語で「猫面」(ニャオビン)と読んでいたこと



猫空の村に到着



ゴンドラ駅、猫空站。

から、「猫空」という名称が付けられた。】

ナンダと、力が抜けてしまう。もともと猫とは無関係なのだが、観光開発するにはネコちゃんですり出すのが良いと考えたのだろう。

まわりには人家や茶屋が並んできて、もはや街歩き散歩になった。案内板に従って進むとゴンドラの駅「猫空站」に着いた。ゴンドラの起点は MRT 動物園駅で、延長 4 キロもあり、2 か所の中間駅もある。所要 20～30 分、往復 300 元だそう。ツアーで行った人もいると思うが、我々はハイキングなので麓まで歩く。

近代的な「猫空站」の建物からは、多数の乗客が傘をさして出で来るところだった。晴れていれば展望を楽しむ場所だ。でも、今日は雨模様で景色を楽しむことはできない。建物のひさしの下では、ダンス愛好会の女性グループが、音楽を鳴らして熱狂的にポップダンスに興じていた。台湾ではこの手の街中ダンスをよく見かける。

時刻は 12 時過ぎなのでお腹が空いている。近場の飲食店も考えたが混みあっているし、注文が面倒かもしれないとやめた。次善の策として「猫空站」内のコンビニで肉まんを買い、解放されている休憩所でおいしい昼食をとった。

昼食後出発。樟樹歩道という小道で麓まで下るのが入り口がわからない。探しながらかけた土地の若者にスマホ翻訳アプリを使って、道を教えてもらった。歩道入り口の表示は「三玄宮歩道」となっていたが他に当てもないのでこれを下る。どこまでもまでコンクリの階段が続く道だった。最後まで下りると、広い車道に出て一安心。

帰ってから調べると進む予定の「樟樹歩道」とは「銀河洞越嶺歩道」が峠となっている箇所から「猫空站」までの、すでに通っていた道であった。結果的には予定コースで歩き通すことができた。

川沿いのマンション街を抜けて予定のバス停に着いた。困ったことに乗りたいバスが、道路のどちら側に来るのかわからない。交差点が変則三角になっていて同じ名前のバス停が複数ある。解決



レトロな建物が並ぶ「深坑老街」

策としてすぐ近くの次のバス停まで歩いた。そのバス停は解り易く、安心してバスを待った。このバス停「政大一站」に 14:15 到着。台北のバス停には多数の異なる路線があるので、乗りたいバスが来たら手を上げないと通過してしまう。このことは事前に仕入れて知っていたが、日本のバスのようにいちいち止まって、乗客にお伺いを立てていたら、運転手、乗客とも面倒なことになるのはよく分かった。

今日の歩行は、登山アプリ「ヤママップ」によると所要 4 時間 32 分、休憩 44 分、登り 488m、下り 546m、歩行距離 7.5km となっていた。

乗ったバス 236 系統は、ホテル前の停留所「萬順寮」を通る。停止ボタンを押しそこなって通過してしまわないよう、バスではちょっと緊張した。

ホテルに着いて一休みの後、近くにある「深坑老街」にいった。「深坑老街」は豆腐料理で有名な。ガイドブックによると、水質が良いので豆腐がおいしいそうだ。ホテルから停留所 4 つめなのでそこまで歩いた。

レトロ風の家並が続く小路が「深坑老街」だった。前もって調べた店は休店だったので、適当な店に入り、夕食とする。特にうまいとも思わなかったが豆腐の揚げ物など変わったものを食べた。

こうして、1 日目のハイキングは何とかこなし。大晦日だったので夜半、ホテルの外で新年の花火を上げていた。泊まった部屋は 17 階という高いところだったので、花火は下に見えた。(続く)

ラストエンペラー愛新覚羅溥儀

和田 宏

中国大陸の最後の封建王朝である清朝最後の皇帝で、日本軍部が偽造した満州帝国皇帝にもなった愛新覚羅溥儀 (Àixīnjuéluó Pǔyí: 1906~1967 享年 61) について、書いてみる。

〈満州族の溥儀〉

溥儀は漢民族ではなく、もともと中国の東北部に住んでいた満州民族である。明を倒して、清朝を建てた初代の皇帝・ヌルハチ (努爾哈赤) から数えて、12代目に当たる。ヌルハチが1616年に満州に「後金」^{こうきん}を建国し、2代目のホンタイジが1636年に国名を『清』と改名した。サンズイ偏の水で明りのついている『明』を消したんだぞと主張した訳である。

1908年(明治41年)、北京の故宮で、2歳の溥儀は、第12代清朝皇帝に即位し、元号から宣統帝と呼ばれた。しかし、共和制を目指した孫文らの辛亥革命によって、4年後の1912年(明治45年)には退位させられた。

ここに凡そ270年続いた清王朝は滅亡。ラストエンペラーだった時の記憶は、6歳の溥儀には残っていない。中国人は、高貴な身分の人を重んじ

るという伝統があるお陰で、皇室優待条件により溥儀はそれまでと同じ北京の故宮に住んでいたが、1924年(大正13年)に、国民党軍人の馮玉祥のクーデターで紫禁城を追われ、日本公使館に身を寄せた。

1929年、溥儀は天津の日本租界に移り住んで、自らが「静園」と名付けた別荘で、静かに暮らした。平民の身分に落ちた溥儀は屈辱に震えながら、復辟、つまり皇帝の座に返り咲くことを夢見ていた。そんな溥儀の想いを実現できそうなチャンスが訪れた。1931年(昭和6年)9月に勃発した満州事変である。この事変は、排日運動を展開する張学良を排除するために、日本の関東軍が奉天市(現在の瀋陽市)郊外の柳条湖で満州鉄道の線路を爆破した自作自演の事件が切っ掛けの戦争だった。

張学良は、父・張作霖を暗殺した日本軍部に一矢報いるために排日運動を展開していたのだ。満州を日本の領土とする強硬策は、欧米諸国から強い反発が予想されるので、関東軍は満州に溥儀を頭首とする政権を樹立することにした。

奉天特務機関長の土肥原賢二大佐が、天津で味気なく暮らしていた溥儀を連れ出しに来た際に、溥儀が最もこだわったのは、「帝国ならば行きましょう」という言葉だった。この言葉が示すように、溥儀が日本に協力する意義は自らが皇帝の座に戻れるかどうかであった。土肥原は「帝国であることは間違いありません」と言った。

〈満州国皇帝の溥儀〉

1932年(昭和7年)3月1日に、満州国の建国が宣言された。こうして中国東北部の大地に表向きは満州人による独立国家の誕生となったのである。溥儀は、満州独立のニュースを旅順で聞いたが、天津で土肥原から聞かされたような帝政国家ではなかった。関東軍高級参謀の板垣征四郎大佐が溥儀のもとを訪れると、溥儀は『建国1年後に帝政に移行し、自分が皇帝になる』という条件を



最後の皇帝・溥儀(右)と父・醇親王載灃、弟・溥傑
(ウイキペディアより)



満州国皇帝時代(1934年~1945年)
(ウイキペディアより)

つけて「執政」という曖昧な地位に就くことを受け入れた。

3月9日には長春(この後、新京に改称)で溥儀の執政就任式が行われた。溥儀は前日に特別列車に乗って長春駅に到着したが、駅前に集まった1

万人近い大群衆の大歓声に、大変、感激した。

1933年3月、リットン調査団の“満州は日本がでっち上げた欺瞞の国”という報告を国際連盟総会が採択したことに、常任理事国だった日本は、反発して国際連盟を脱退。国際的孤立を深め、太平洋戦争へ向かって軍国主義を強めて行った。

満州国建国後も関東軍の軍事行動は止まらず、1933年(昭和8年)2月から3月にかけて熱河省へ侵攻する「熱河作戦」を実行した。熱河省を制圧した関東軍は、その勢いを駆って「万里の長城」を越え、北京のある河北省へもなだれ込んだ。この報を聞いた溥儀は、かつて追放された紫禁城に戻り、そこで再び皇帝となることを期待して身を焦がした。だが、関東軍は中国との全面戦争となることを恐れて、軍事行動を収束させた。

一度退位した自分が再び北京で皇帝になることは出来ず失望したが、約束から1年遅れの1934年(昭和9年)3月1日、満州国が帝政に移行することになった。28歳の溥儀は、仰々しいセレモニーとともに念願の満州国皇帝・康德帝の名で(在位1934~1945)即位した。溥儀は大いに満足して一日中はしゃいでいたという。

満州国の皇帝・溥儀は、日本の天皇と同格として扱われた。1935年(昭和10年)4月6日、溥儀の初来日の際、大連から横浜港を経て東京駅に到着した溥儀を、日本国の現人神の昭和天皇・迪宮(みちのみや)裕仁が、駅のプラットホームまで出

向いて出迎え、列車から降りて来た溥儀に頭を下げて、握手をしている。これは当時、天皇が外国からの来賓を迎える異例の対応であり、両者の緊密な関係を示す象徴的な出来事として報じられた。

しかし、満州国の実態は日本の傀儡国家であり、溥儀は何の権限も持たないお飾りだった。満州帝国は、1945年8月15日の太平洋戦争の終結とともに終わりを迎えた。今の中国人達は、日本軍がでっち上げた欺瞞(ぎまん)に満ちた偽物国家と見做して、「偽満(weiman)」と呼んでいる。

〈終戦後、5年間の拘束〉

1945年8月15日の日本降伏後、溥儀は、満州国皇帝を退位し、日本への亡命を図ったが、8月17日に瀋陽の飛行場でソ連軍に捕らえられた。

ハバロフスク近郊の思想収容所に「名誉囚人」として軟禁され、再教育を受けた。1946年7月から8月にかけて東京の極東国際軍事裁判には証人として出廷し、“満州国時代は日本軍の脅迫によるもので、止むを得なかった。”などと証言した。

1950年に戦犯として中華人民共和国に身柄を引き渡されるまで、ソ連で凡そ5年間、抑留生活を送った。

〈帰国と植物園の一労働者〉

中国では、国共内戦の末、毛沢東、朱徳の率いる共産党軍が勝利し、1949年(昭和24年)10月に中華人民共和国が成立した。

ソ連に拘束されていた溥儀の身柄は、1950年(昭和25年)に中国共産党に引き渡され、撫順戦犯管理所で、一市民としての思想改造の教育を受けた後、1959年に特赦で釈放された。1964年に、満洲民族の代表として、中国人民政治協商会議の全国委員に選出されたこともある。

晩年は北京の植物園で、好きな植物の世話をする一庭師として働き、平穏な日々を送り、1967年(昭和42年)10月、61歳の生涯を閉じた。

〈5人の妻、だが子どもはいない〉

ところで、溥儀の配偶者は、どうなっていたのだろうか？

溥儀には、生涯で5人の妻(正妃・側室)がいた。皇后の婉容(wanrong 1906~1946 享年39)、側室



手を取り合う溥儀と婉容(ウィキペディアより)

の文綉、譚玉齡、李玉琴、そして最後の妻である李淑賢である。

1922年、皇后の婉容は、16歳で同い年の溥儀に嫁いたが、男色だったという溥儀が婉容に愛情を持って接することはなかった。

婉容が、別の男性との子を出産した際は、生後直ぐに溥儀の命により殺されたとされている。溥儀には子どもはいない。

婉容は、毎日孤独な日々を過ごし阿片に溺れて廃人同様となり、八路軍の収容所で栄養失調のため死亡した。享年39。

〈弟・愛新覚羅溥傑と日本〉

溥儀より1歳下の弟・愛新覚羅溥傑(1907～1994 享年86)は、“日満親善”という日本軍の国策によって、嵯峨実勝侯爵の長女に生まれた嵯峨浩(1914～1987 享年73)と無理矢理、結婚させられたが、二人は見合いの時からお互いに好感を抱き、



結婚式当日(1937年)の愛新覚羅溥傑と嵯峨浩(ウィキペディアより)

1937年に結婚し、相思相愛の大変幸せな人生を送った。

しかし、二人の間に出来た長女の愛新覚羅慧生は、1957年の12月4

日に伊豆の天城山で、学習院大学の同級生だった大久保武道とピストルで心中してしまった。

浩の弟である嵯峨公元(1922～1998 享年76)は、姉思いで、浩が夫・溥傑の居る北京に帰ってから日本と中国を往来し、溥傑・浩夫婦に物資を送るなど援助した。

文化大革命の嵐の最中にも、浩の求めに応じ、命がけで物資を運んだ。その訪中は100回を超えた。『お姉さんは大変な結婚をした人だから、どんな事をしても助けてあげないと』というのが公元の口癖だった。

私・和田宏は、1985年7月に門司港で公元氏と面会した時、浩が執筆した『流転の王妃』と言う非売品の自伝を頂戴した。

〈溥傑と孝道山〉

日本人女性と結婚した愛新覚羅溥傑と、ゆかりの場所がある。それは、東急東横線「東白楽駅」から東南方向へ徒歩3分の所にある横浜市神奈川区鳥越の『孝道山』というお寺である。溥傑は、高名な書家でもあり、お寺の本殿には、溥傑が揮毫した額や掛け軸が展示されている。溥傑は「相依為命(あいよっていのちをなす)」という言葉が好きで書き残した。これは「互いに助け合い、支え合って生きていく」という意味で、戦後の日中友好や平和への願いが込められている。境内からは横浜の市街地や、「みなとみらい」の風光明媚な景色を見渡すことができる。春になれば、あたり一面に桜が咲き、美しい光景が広がる。



筆者の短歌。

♪梅は散り桜の花が咲き乱れ

春を謳歌す横浜の寺

(完)

能 — その創成期を紐解く

福島 ひろこ 裕子

能を習い始めてもうすぐ丸5年になるが、日々、その奥深さに魅了されている。能は室町時代に観阿弥・世阿弥親子によって大成された伝統芸能と歴史で習った。この2人の天才のほか、多くの芸能人たちとそれを守り育てた人々の営みが結実したものだ。その創成期にフォーカスしてみたい。

●能はどこから

飛鳥時代から奈良時代にかけて中国から散楽が伝わり、転化して猿楽と呼ばれるようになった。平安時代から鎌倉時代にかけて、寺社の祭礼の際に「翁(おきな)」を演じる猿楽座は畿内に数多くあった。能は言わばその余芸として生まれたもので、物真似・歌舞・寸劇・曲芸などを行っていた。やがて歌舞中心の劇的なものは「猿楽の能」、台詞中心の滑稽なものは「猿楽の狂言」と呼ばれるようになる。

同時期、猿楽の他に豊作への祈りを込めた田楽があった。楽器(すりささら、腰鼓、笛)に合わせて舞い歌う。平安時代は貴族が遊興のために催すことも多かった。田楽は大流行し猿楽と人気を二分したが、やがて衰退し消えてしまう。

●「翁」とはどんな曲？

「能にして能にあらず」と言われる「翁」は、天下泰平・五穀豊穰・国土安穏を祈る神事芸能だ。三役(千歳・翁・三番叟)が古風な様式に則って順に

舞う。通常の能ではシテは面を付けて舞台に登場するが「翁」では役者は人として舞台に登場し、そこで面を付けて神に変身する。

翁役者たちは猿楽座の中の上位を占め、大夫と呼ばれる能役者たちはその下に位置付けられていた。まず「翁」が演じられてから、次に能が演じられるものだったからだ。

1375年、足利義満の許しを得て、観阿弥は能役者として初めて「翁」を演じた。それ以後、翁役者たちの地位は低下し、座の名前も大夫の名(観世・金春・宝生・金剛)にちなんで呼ばれるようになって行く。

●義満と観阿弥との邂逅

室町幕府三代将軍の足利義満(1358~1408)は、天皇家が約60年に渡り吉野と京都に分断した南北朝時代を終わらせた。また明との国交を回復し、勘合貿易を推し進めた。1404年から約50年間に17回、84隻の遣明船が派遣されたと言う。

加えて室町に将軍家の邸宅(花の御所)を造営し、晩年には巨費を投じて設営した北山殿(金閣)で北山文化を育んだ。

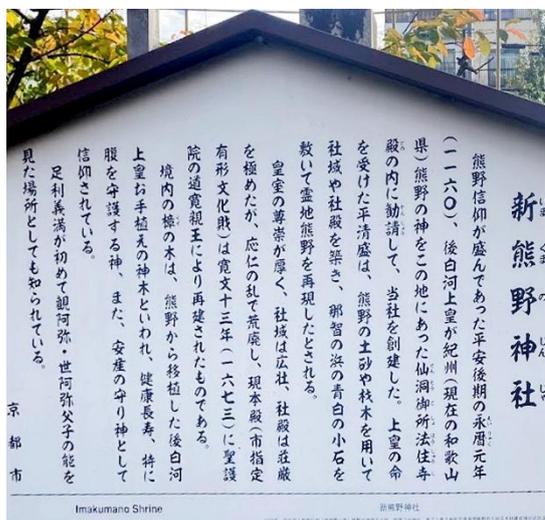
義満は16歳の若き日、東山の新熊野神社で行われた観阿弥の能を見物した。当時、猿楽は田楽の人気に押され気味だったが、観阿弥は田楽役者を凌駕する人気と実力を誇っていた。義満は観阿弥

の芸のみならず、息子の世阿弥(当時12歳)の美しさに魅了された。義満のサポートを得て、観阿弥・世阿弥親子は芸に邁進し、数多くの傑作を生み出して行く。

観阿弥が息子



1160年に創建された新熊野(いまくまの)神社



新熊野神社・立看板

の世阿弥に歌や蹴鞠を習わせて、貴人好みに仕立てて行ったことが功を奏したようだ。義満に先駆けて、前関白の二条良基は世阿弥に入れ込み、藤若と言う幼名を彼に授けている。

●もう一人の天才：犬王^{いぬおう}

私たちは、世阿弥が『風姿花伝』『花鏡』等、20余編もの著書を遺したお陰で、父子の芸能への思いと作品を知ることが出来る。しかし彼らの活躍した時代には、もう一人の忘れ去られた天才がいた。それは近江猿楽の犬王だ。

義満は自らの法名の「道義（どうぎ）」から一字を犬王に与え「道阿弥」と名乗らせている。その寵愛は観阿弥・世阿弥以上だったようだ。

犬王は生年を含めてほとんど何も分かっていないが、世阿弥より年上だったらしい。彼がひとつの頂点を極めたのは1408年、後小松天皇が北山殿に行幸した際、天覧能を務めたことだろう。世阿弥も犬王を高く評価していた。その芸風は貴族好みの高い芸術性を持ったものだったらしい。

この忘れ去られた天才能役者にスポットを当てたアニメーション映画が、2022年に公開された。小説『平家物語 犬王の巻』（古川日出男著:2017年刊）をベースに、大胆な解釈で犬王の舞台をロックライブのように描いている。当時の人々の熱狂ぶりはそれに近いものだったかも知れない。

●世阿弥を襲う不幸

世阿弥は22歳で父を亡くした。30歳を過ぎる頃には義満の世阿弥への愛着が少しずつ冷めて行

ったがそれでも支援は変わらず続いていたようだ。義満の没後、室町幕府の後を継いだ足利義政は田楽の増阿弥を最頂にしたが、世阿弥の幕府お抱え役者としての立場は尊重した。

暗雲が立ち込め



奈良興福寺南大門跡・薪御能の野外舞台

るのは、義教（義満の息子）が還俗して六代将軍に立った時からだ。義教は世阿弥の甥の元重（音阿弥）を寵愛し、世阿弥と息子の元雅を疎んじた。元雅は父の世阿弥から見ても非凡な才能の持ち主だったが、30代の若さで伊勢で客死してしまう。その翌年、追い討ちをかけるように世阿弥は佐渡に流されてしまった。その後の世阿弥の消息はよく分かっていない。

●創成期の能に触れられる催し

最後に奈良で続いている二つの催しをご紹介します。一つは、薪能のルーツとされる「薪御能」だ。古くは二月の修二会の際に薪を炊いて演じられた神事能。現在は5月中旬に春日大社と興福寺南大門跡で2日間に渡り、観世・金春・金剛・宝生の四派によって上演されている。

もう一つは12月17日に行われる春日若宮おん祭りだ。春日大社の子供の神様、若宮様が年に一日だけ御旅所に移られる。そこでありとあらゆる伝統芸能が若宮様のために奉納される。当時の芸能のあり様を今に伝える貴重な祭りだ。今年で850回目だが始まって以来一度も絶えたことが無い。

創成期の能について調べるにつれ、猿楽や田楽と言った芸能が、当時の人々を熱中させていたことを知った。得てして“崇高な芸術”と遠巻きにされがちだが、当時の人々の目線で鑑賞してみれば違うものが見えてくるかも知れない。



アニメ映画「犬王」の原作小説

●徒然なるままに

健康の見方

後藤 芳昭

健康の意味は何か？ 自分または他人、社会が病んでいない状態と考えていた。

しかし、《ヒトの幸福とはなにか》(養老孟司著 筑摩書房)の中に健康であることの意味は、「おかげでなにかができること」である、とあった。

健康を静止状態ではなく活動動態でとらえる至言であると気に入った。

では、中国ではどうか？

例によって字の解釈から始める。「健」とは、力があるという意味、「康」とは体内の気のめぐり(経絡)が順調という意味。あわせて元気で力があり、気の巡りも順調ということだ。

具体例は、“天行健，君子以自强不息，地藏坤，君子以厚德载物”(天の運行は、健やかで休むことはない。それと同様に、君子も自らつとめてやむことなく努力を続けなくてはならない。大地はあらゆるものを載せている。君子はあらゆるものを寛容する心を磨くこと。安岡正篤著 「易経講座」致知出版社より)。

やはり「健」は天の運行の健やかな作用・働きであって春夏秋冬、少しも停滞することのない、間断のない作用であると言う。活動動態であるとしている。ちなみに、12月中旬でwowowでの配信が終わった、全36回の中国テレビドラマ「天行健」は、清朝末期の革命人の新社会建設に向けた力強い生涯の物語だった。

「康」の意味は、5つの方向の道路がすべて円滑に通じていること。中医の気血理論によれば「气足有力为健，经络通畅顺达为康」(気に力が足りてれば健、経絡がスムーズに流れていれば康)とある。

平和な令和を生きる者は、健康を何かができることで済ませるが、時代や国がちがえば呑気に健康を享受できないかもしれない。

夏の薬膳料理講習会(予告)

今年も高温の夏が予想されています。そんな厳しい夏を乗り切るための薬膳料理を、おなじみの趙迪さんに教えて頂きます。

前回同様、料理講習会の前に、薬膳の初歩的知識や、夏の身体に有効な食材・料理法を教えるための座学を4月末か5月初旬に、玉川学園コミュニティーで開催する予定です。

本講習は6月初めに麻生市民館で開催したいと考え準備に入りました。

但し日時がだいぶ先のことで、会場の確保が抽選のため、確定した日時がお知らせできません。わんりい4月号で詳細をお知らせ出来ると思いますので、どうぞ楽しみのお待ちください。

~~~~~

- ・薬膳料理座学 4月末または5月初め
- ・薬膳料理本講習 6月前半

## ◇満柏画伯の漢訳俳句◇

### 春雨の

### われまぼろしに

### 近き身ぞ

正岡子規

piāo miǎo chūn yǔ zhōng

缥 缈 春 雨 中

wú shēn jìn ruò huàn

吾 身 近 若 幻

# 和気藹々の“わんりい新年会”



2026年の「春節」は2月17日でした。“わんりい”では、さっそく、恒例の「シュワンヤンロウ(羊肉のしゃぶしゃぶ)を楽しむ新年会」を2月23日に開催しました。会場は昨年と同様に小田急線「新百合ヶ丘駅」近くの「麻生市民館料理室」でした。当日、ご参加いただけなかった方々のために、和気藹々だった新年会の模様を報告いたします。

午前11時の開会予定をお知らせしておりましたが、御奇特な会員の方々が“準備を手伝ってやろう”と、10時過ぎから来てくださったので、先ずは対聯と大扇の飾りつけをして、ぐっと雰囲気が出て来ました。

毎年、男性陣がひと汗掻かずには済まないのが、しゃぶしゃぶのタレ作りです。本場北京の味を再現すべく、「芝麻醬」に少しずつ水を加えながら、箸でかき混ぜ続けるのも仲々の力仕事ですが、この時、同一方向に箸を回さないと、固まってしまい、とんでもないことになります。今年は4人の方が交替で作業して丁度良い加減にな



ポウルの中身を箸でグルグル

ったところへ固形物をスプーンで潰した「腐乳」を加えて、無事、出来上がりました。

助っ人のお陰で下拵えも済んだところで、久し振りの再会に話が弾んで

いました。

定刻をちょっと過ぎての開会となり、最初の挨拶と乾杯の音頭を殷秋瑞さんにお願ひしました。どんな様子だったか、ご想像の通りです。その声量に料理室の窓ガラ



材料の準備が済んで、暫し歓談

スが震えました。初めて参加された4人の方の紹介があり、続けて「シュワンヤンロウ」の食べ方の説明が有りました。曰く、「始めは肉だけをお湯に潜らせ、タレを入れたお椀に取り食べてください。自分がお湯に潜らせた分だけ食べてください。他の人の分まで鍋に入れしないでください。野菜や餛飩は肉を食べ終わってから入れます」。各人が4つの調理台を自由に行き来して、肉と野菜を堪能しつつ、旧知の方々、会話するのは初めての方との間で歓談が続きました。

材料とお鍋が空になったころ、余興タイムに移り、司会と進行は福島裕子さんが担当されました。



話しに夢中になって、箸が止まってしまう



フルートの伴奏で和田さんの熱唱

先ず、福島さんが二胡の演奏を披露し、続いて、和田宏さんが、福島さんのフルート伴奏で、年齢を感じさせない歌声を聞かせました。安斎眞利子さんは CD の伴奏に合わせて澄んだ歌声を披露されました。一昨年からは始まり恒例になった、寺西代表のダンスは福島さんのフルート演奏する 2 曲を、樊婷婷さんをパートナーとして披露されました。鮮やかな黄色のドレスは一輪の花が咲いたようでした。調理台の間を縫って踊る社交ダンスは凡そ、他所では絶対見られないものだと思います。

続いて、セミプロの音楽活動をなさっている今井加代子さんがお得意のシャンソンを披露されました。そして、再び、ダンスのペアが登場しました。それぞれブラックジャケットと真っ赤なドレスで、競技用のコスチュームだと思われました。福島さんのフルートの演奏に合わせて踊った後



寺西・樊ペアの華麗なルンバ

に、今井さんの歌唱に合わせても踊りが披露されました。料理室の中とは思えない雰囲気でした。

最後に、全員で “♪ 鳶のからまるチャペルで、祈りを捧げた日～♪” と懐かしい歌一



再登場して、今井さんのナマ歌での踊り

「学生時代」を合唱しました。

お楽しみの最後はやはり恒例となったビンゴ大会でした。正面中央の調理台の上に小型のビンゴマシン、景品が並び、全員にビンゴカードが配られました。

ビンゴマシンのハンドルを回し「玉」を拾い上げる係、「玉」の番号を読み取り、発表する係、その番号を紙に記入し掲示する係を分担しました。転がり出た「玉」の番号が発表されるたびに、「ヨシッ」や「ダメだァ」の声が聞こえ、そのうち誰かから「リーチ」の声が掛かると、自分のビンゴカードを見つめる目が真剣になり、一段とボルテージが高くなりました。

やがて「ビンゴ」の人が次々に現れ、正面に積まれた景品の中から好みに合う物と、フォーチュンクッキーを一つずつ受け取って席に戻りようになりました。しかし、なかなか「ビンゴ」に到達しない方がお一人いらっしゃって、他の皆さんから大きな声援を受けていました。全員が「ビンゴ」になり、景品が渡ったところで終了となりました。

その後、期日は未定ながら、6月に予定している「薬膳料理講習会」とそれに先立つ「座学講座」のお知らせがあり、「PR タイム」として「お知らせ」や「お願い」がある方の発言を頂いてから、お開きになりました。30名を越える参加者があり盛会でした。気の早い話ですが、来年も心待ちにさせていただき、是非ご参加をご検討ください。

**第 232 話 4本の脚**

エペンディの片方の目は少し斜視でした。ある日、国王は偶然に彼とめぐり逢い、言いました。

「エペンディよ、お前の斜視は悪くないなあ。お前の目の中では、一つのものが二つに見えるんだろう？」

エペンディはすぐに答えました。

「陛下、おっしゃる通りです。今、私は陛下が脚を4本お持ちのように見えておりますよ」

(「エペンディ」はウイグルやカザフなど少数民族の伝承の中で、機知に富んだ人物とみなされ、エペンディを主人公とした頓智話が人形劇などに仕立てられ、中国人の間に非常に人気がある)

**第 233 話 西瓜を食べる**

ある時、金持ちとエペンディが宴会で隣同士に座りました。金持ちはエペンディをからかってやろうと思いました。宴席に西瓜や甜瓜など果物が運ばれて来た時を待って、金持ちは自分が食べ終わった果物の皮をみんなエペンディの前に押しやり、大声で言いました。

「皆さん、エペンディは凄い食いしん坊ですよ！彼は西瓜と甜瓜を誰よりも沢山食べましたよ。嘘だと思えば、彼の席に置かれた皮の量を見てごらんないよ！」

するとエペンディは、この金持ちを指さして、みんなに言いました。

「私は西瓜を食べて皮は残しましたよ。彼こそ本物のけちん坊で食いしん坊ですよ。西瓜のへたも皮もみんな食べてしまいましたよ。嘘だと思えば、彼の席を見てごらんない。皮もなくてきれいですよ」

**第 234 話 引っ越し**

ある晩、コソ泥が何人かでエペンディの家にやってきて、家具や家財道具一切を持ちだしました。コソ泥たちが門を出たばかりの処で、エペンディが、コソ

泥たちの取り残した小物を両手いっぱい持って、彼等の後を、一緒に出てくるのを見つけて、コソ泥ん一人が声を掛けました。

「エペンディさん、こんなに夜遅く、どこへ行くんですか？」

エペンディは答えました。

「このところずっと、引っ越しをしようと思っていたのだが、ロバや馬車が見つからなくて、出来なかったのだが、今晚は皆さんのお陰で引っ越しが出来ますよ」

**第 235 話 義足**

エペンディは小さい頃、とても正直な子供でした。ある時、彼は家中の空き瓶を集めてお店に持っていききました。番頭は1瓶60銭で買ってくれました。ところが彼が見ていると、大人の人が同じような瓶を売りに来ると、番頭は1瓶100銭で買いました。

それを見たエペンディは、急いで家に帰り、丸太で2本の義足を作り、それを脚に括り付けて、またあの店に瓶を売りに行きました。番頭は怪訝そうに訊きました。「それはいったい何のまねだね？」

エペンディは答えました。「番頭さんは大人には1瓶100銭払ったでしょ。だから、僕がこれぐらい背が高くなれば120銭払ってくれると思ったんだよ」

**第 236 話 鷹の魂**

王様は狩りをしたくなりエペンディに命じて言いました。「お前は猟をする鷹を連れて、皆と一緒に行きなさい」。エペンディは命令通りに鷹を一つの袋に詰め込んで出かけました。狩場に着くと王様は「鷹はどこだ？」と訊きました。「袋の中にいます」。

王様が袋を開けてみると、鷹は全部窒息死していました。エペンディは「不思議だなあ」と言いました。「袋の口は堅く縛ったので、鷹の魂はどこにも行けないはずなんだがな」

## 【わんりいの催し】

### ♪ ボイス・トレで日本語の歌を歌おう！

身体力を抜いて気持ちよく発声しよう！  
声は健康のバロメーター！！

\*動きやすい服装でご参加ください。

- 会場：玉川学園コミュニティーC 多目的室 3
- 日時：3月 3日（火） 10：00～11：30  
4月 14日（火） 10：00～11：30
- 講師：Emme [エメ]（歌手）
- 会費：2,000 円（講師謝礼・会場費）
- 定員：15 名（原則として）
- 申込：☎042-735-7187（鈴木）

~~~~~

∞ ∞ わんりいの中国語勉強会 ∞ ∞

- 場所：鶴川市民センター
- 日時：毎週火曜日 14：00～16：00
- 講師：郁 唯（天津師範大学卒業）
- 会費：5000 円（会場費・講師謝礼）
- 定員：10 名（原則として）
- 申込：柳田 ☎090-4677-7793
e-mail:yanagita_hi@yahoo.co.jp



■ 定例会 代表宅

- ▼ 3月 12日（木） 13：45～
- ▼ 4月 15日（水） 13：45～

■ ‘わんりい’ 発送 三輪センター

- ▼ 4月号 4月 1日（水）
- ▼ 5月号 未定

☆☆ 編集後記 ☆☆

早いもので、2026 年も 2 か月が過ぎ去ってしまいました。その間、近年の例にもれず気温の乱高下が激しく、2 月なのに本州の都市で 25℃以上の夏日を初めて記録しました。

それでも「春は桜」と楽しみにしていましたが、ショッキングなニュースを耳にしました。“咲き揃えば圧巻”の桜並木の中から、かなりの木が、開花を待たずに伐採されるのだとか。原因は、最近日本に上陸した外来種クビアカツヤカミキリが、桜の幹に卵を産み付け、卵からかえった幼虫が幹を食い荒らし木を枯らすからです。繁殖力が強いので、花が咲くまで待てず、卵が成虫になる前に伐採をするのです。この虫はウメやモモも好み、すでに被害が報告されているので、日本の春の景色が損なわれる可能性もありそうです。

~~~~~

‘わんりい’は、新入会をいつでも歓迎いたします

年会費：1800 円、入会金なし

郵便局振替口座：00180-5-134011 わんりい

10 月以降の入会は、当年度会費 1000 円

■ 問合せ：044-986-4195（寺西）

## ‘わんりい’ 311 号の主な目次

|                |    |
|----------------|----|
| 葉膳のお話（11）      | 2  |
| 中国そぞろある記（6）    | 3  |
| 晩秋のカラコルムにて（12） | 5  |
| 四川・カム紀行（3）     | 7  |
| 台北で雨のハイキング（1）  | 10 |
| 愛新覚羅溥儀         | 13 |
| 能—その創成期を紐解く    | 16 |
| みんなの広場         | 18 |
| 中国の笑い話（65）     | 21 |
| ‘わんりい’の催し・お知らせ | 22 |